

# 豚副腎における結核を疑う病巣

酪農学園大学獣医学科家畜病理学教室出題 第12回獣医病理研修会標本 No.181



北海道有珠郡黄金町で飼育されていた2～3才のヨークシャー雌豚の副腎。ホルマリン固定，H-E染色。

臨床的事項：2ヶ月前に分娩。屠殺3日前より元気消失が著明となったが，食欲は常であったという。呼吸速迫，起立不能に陥り癱用屠殺。体温38.7℃。

肉眼的所見：両側副腎，包膜面に結節状隆起を伴い鶏卵大に夫々腫大。剖面膨隆。暗赤色を呈する髄質は中心部に圧偏されて認められ，一部皮質領域との境分明でない。皮質領域は巾を増し，乾酪様病巣を含む灰白色組織がその大部を占め，淡黄色の固有皮質組織は，前記灰白色増殖組織内に離断圧偏され，主に髄質周囲及び皮質周辺に認められる。乾酪化巣切開の際軽度の軋音あり。提出副腎以外，肺左心葉に大豆乃至蚕豆大結節の集合した鶏卵大の結節を認め，これ又軽度の乾酪化を示す灰白色髓様組織よりなる。左腎の両端に癩痕性萎縮を見る。肝はにくずく様紋様形成。脾及び心著変認めず。

組織学的所見：組織球，類上皮細胞，Langhans型巨細胞，リンパ球，線維芽細胞，線維細胞などよりなり，好銀線維及び膠原線維の増生も特殊染色で明瞭な増殖性病巣は，副腎皮質全域に亘って認められ，固有皮質細胞はその中に索状又は島状に残されている（写真1，H-E， $\times 135$ ）。増殖病巣内にエオジン好性無構造乾酪様壊死域

が内包され，この壊死部は周辺性に好中球を混える細胞崩壊帯を持つ。壊死部に軽度の石灰沈着を見る。髄質は圧偏されている。

肺の結節病巣も組織学的に副腎のそれと同性状を示す（写真2，H-E， $\times 135$ ）。恐らく副腎周辺にあったリンパ節も，乾酪化傾向は軽度であるが，以上と同性状の増殖組織に置換されており，固有組織は僅かに残すのみで，この所見は病理研修会No.149（帯畜大）豚腸間膜リンパ節所見と共通する。腎において糸球体血管極周囲にリンパ球，巨細胞よりなる細胞集簇形成を認める。肝においても，類洞内に巨細胞の発現，肉芽腫様小結節を散見したが，内皮活性は認めない。心筋に小結節1ヶを認めた。

副腎，肺及びリンパ節病巣は何れも，グラム及びZiehl-Neelsen染色に陽性の物体を示さなかった。明らかな結核病変においても，切片上菌検出不能なことがあるといわれる。本例はHodgkin氏病所見とも相似する。H氏病が反応性増殖か，腫瘍か議論のある所であるが，前者を支持する中に，原因に結核菌を考える人もいる。

本例は菌検出には成功しなかったが，結核を充分疑える病変であると診断された。